



昭和19年4月20日 兵庫県立医学専門学校一回生入学記念



神緑会館と事務棟・附属病院外来棟全景（左奥に旧第一病棟を望む）平成13年11月



明治2年に開院した神戸病院。手前の建物番屋前の左再山(再度山)道の道標(矢印↑)は現在も残っている。



入口へ見通す神緑会館通路

目次	ページ
平成30年度一般社団法人神緑会定時(社員)総会並びに学術講演会プログラム(6月16日)	3
卒業式と謝恩会 謝恩会写真	
卒業に寄せて *豊国 秀昭	6
卒業の日によせて *田中 佑季	7
第38回神戸大学関係病院長協議会総会・講演会	9
平成30年度神戸大学白衣授与式	
式次第	10
感想 *鳥井 大輝	11
新入生歓迎宿泊及び学内指導、救急講習	12

目次	ページ
「英語サロン」1年間の経験と今後の運営について	
久野 高義	13
楠原仙太郎	14
退職にあたって	16
メモリアル：東 健先生のご逝去を悼む	
高井 義美	18
メモリアル：松本 悟先生を偲ぶ会	
甲村 英二	21
神戸大学医学部75周年記念 座談会(第2グループ)	22
コース特待生2名決まる！ 編集後記	32

*学生

今は自由にアクティブに暮らしたいけれど、 将来の介護は不安という方へ

予約不要のレストラン、大浴場、温水プール、フィットネスルームなど
共用部が充実。シャトルバスが三宮、元町へも無料運行。



夕食の一例



ウォータービューダイニング



温水プール

安心の医療支援体制と介護体制

将来介護が必要になっても、要介護者3人
に対してケアスタッフ(看護師含む)2人
以上という手厚い介護体制



おかげさまで
オープン後
はじめての春を
迎えました！

介護付有料老人ホーム **入居時自立**

サンシティタワー神戸

所在地

〒651-0073
神戸市中央区脇浜海岸通2-3-5

アクセス

阪神電鉄本線「神戸三宮」駅より
1駅の「春日野道」駅下車
徒歩 約7分(約0.56km)



土地建物の権利形態/事業主体非所有

ご予約時に日程をご相談下さい。

個別見学受付

要予約



受付時間/午前9:00~午後5:00(土日祝も受付)

0120-33-1655

【サンシティタワー神戸概要】●所在地/神戸市中央区脇浜海岸通2丁目3番5号 ●敷地面積/12,431㎡ ●建築面積/5,861㎡ ●延床面積/57,391㎡ ●構造規模/RC造(一部S造)、地上35階 ●居室数/483室(37.30㎡~112.76㎡)、介護室/91室91名、一時静養室/4室4名(20.8㎡~25.61㎡) ●土地・建物の権利形態/事業主体非所有 ●事業主体・運営管理/株)ハーフ・センチュリー・モア ●返還金制度/あり【協力医療機関】■住友病院(大阪市北区中之島5-3-20、施設から約33km) ●主な診療科目/一般内科、リハビリテーション科、心臓血管外科、神経内科、放射線科ほか ●協力内容/人間ドックに利用できます■兵庫医科大学病院(兵庫県西宮市武庫川町1-1、施設から約18.5km) ●主な診療科目/総合内科、外科、眼科、整形外科、脳神経外科ほか ●協力内容/高度医療を必要とする場合の入院、外来、緊急時の対応、人間ドックに利用できます【同一建物内クリニック】■岩永メディカルクリニック(別法人) ●主な診療科目/内科、外科、消化器内科、リハビリテーション科【神戸市有料老人ホーム設置運営指導指針による表示事項】●類型/介護付有料老人ホーム(一般型特定施設入居者生活介護) ●居住の権利形態/利用権方式 ●利用料の支払い方式/全額前払い方式 ●入居時の要件/入居時自立、満70歳以上の方 ●介護保険/神戸市(兵庫県)指定介護保険特定施設、神戸市(兵庫県)指定介護予防施設 ●介護居室区分/全室個室 ●介護にかかわる職員体制/1.5:1以上 ●お客様の個人情報は、資料の発送や見学会のご案内のほか、各種の統計調査に利用する場合があります。尚、個人情報はご本人の承諾なしに第三者に提供することはありません。不都合がございましたらフリーダイヤルまでご連絡ください。

(株)ハーフ・センチュリー・モアは大手企業約100社が出資する資本金120億円で、借入金のない会社です。

もう半世紀すこやかに
株式会社 ハーフ・センチュリー・モア

〒107-6030 東京都港区赤坂 1-12-32 アーク森ビル 30 階
☎0120-77-5088 TEL. 03-3505-6688 FAX. 03-3505-6198

www.hcm-suncity.jp

【主な出資企業】三井住友銀行・みずほ銀行・三菱東京UFJ銀行・西日本旅客鉄道・三洋電機(パナソニック)・塩野義製薬・ダイキン工業・ヤンマー・江崎グリコ ほか

平成30年度 一般社団法人 神緑会 定時(社員)総会並びに学術講演会プログラム

平成30年6月16日(土) 於・外来診療棟6階 大講義室

☆ 定時(社員)総会 (15:00~16:00)

- 議長による開会宣言(会長挨拶)
- 議事録記名人の選出

1 審議事項

- 1) 平成29年度 事業報告について
- 2) 平成29年度 決算報告について
- 3) 平成29年度 監事監査報告について
- 4) その他

2 委員会報告等

- 1) 学術委員会報告
- 2) 情報委員会報告
- 3) その他(神戸大学医学部創立75周年 神戸病院創立150周年記念事業寄附について)

☆ 平成30年度 田中千賀子学術奨励賞並びに研究助成金授与式

《休憩》

☆ 学術講演会 (16:10~18:05)

I 田中賞受賞記念講演 (16:10~16:35)

『手根管症候群に対する電気生理学的重症度分類の役割』

神戸労災病院整形外科・リハビリテーション科部長

金谷貴子先生(平成2年卒)

II 特別講演 (16:35~18:15)

『神戸大学医学部附属病院のミッション』

神戸大学医学部附属病院 病院長 平田健一先生(昭和59年卒)

(16:35~17:05)

『小児ネフローゼ症候群の新規治療法開発と病因探索研究』

神戸大学大学院医学研究科 内科系講座小児科分野

教授 飯島一誠先生(昭和57年卒)

(17:05~17:35)

『感染症専門医の役割』

神戸大学大学院医学研究科 微生物感染症学講座

感染治療学分野 教授 岩田健太郎先生(島根医科大学平成9年卒)

(17:35~18:05)

☆ 情報交換会(於:神緑会館多目的ホール) (18:15~20:00)

プロフィールと講演要旨

■田中賞受賞記念講演



金谷 貴子 (かなたに たかこ)

神戸労災病院整形外科・リハビリテーション科部長

略歴 平成2年神戸大学医学部卒業、神戸大学整形外科医局入局
神戸大学付属病院、神戸労災病院で研修医のあと平成3年神戸大学医学部大学院入学
平成7年医学博士号取得（第一生理学教室）
平成8年新須磨病院整形外科
平成10年米国ハーバート大学 Brigham & Women's hospital; クリニカルフェロー
平成11年新須磨病院整形外科
平成13-15豪州マイクロサーチファンデーション; リサーチフェロー、手移植の研究
平成15年帰国後、神戸大学病院勤務6か月後、神戸労災病院勤務、現在に至る

資格 日本整形外科学会専門医・脊椎脊髄病医
日本手外科学会専門医
中部日本整形外科学会災害外科学会評議員
身体障害者申請医
難病指定医装具判定師

Italian Institute of Hand and Microsurgery; International consultant

所属学会 日本整形外科学会
日本手外科学会
日本マイクロサージャリー学会
日本リハビリテーション学会
日本末梢神経学会
アメリカ手外科学会国際会員

演題「手根管症候群に対する電気生理学的重症度分類の役割」

講演要旨：手根管症候群（CTS）に対する手根管開放術は gold standard であるが適応基準の統一はない。当院では、母指球筋萎縮例や、保存療法にて痺れ、知覚鈍麻が改善せず ADL に影響を及ぼす症例に推奨するが、最終的な選択は患者に委ねている。今回、電気生理学的重症度分類（Stage 1-5）を用いて、重症度レベルの手術選択における役割を検討した。対象は臨床上 CTS と診断した1079手で各 Stage での手術選択率を調査した。重症度の分布状態は Stage 1: 50手, 2: 201手, 3: 235手, 4: 364手, 5: 227手となり Stage 4 が最多を占めた(34%) (分類不能: 2手)。手術選択総数は443手(41%)で、Stage 1: 5手 (10%), 2: 24手 (12%), 3: 65手 (28%), 4: 188手 (52%), 5: 161手 (71%) と重症度に並行して増加し、Stage 5 での手術選択率が有意に高かった (χ 二乗検定: $p < 0.0001$)。

CTS の電気生理学的重症度は、臨床的重症度とは必ずしも一致しないとされているが、手術選択率の増加は ADL 障害度の増大を示唆しており、手術選択の指標になると考えられた。

■特別講演



平田 健一 (ひらた けんいち)

神戸大学医学部附属病院 病院長

学歴 昭和59年3月 神戸大学医学部卒業
平成4年3月 神戸大学大学院医学研究科修了
職歴 昭和59年4月 神戸大学医学部附属病院 第一内科入局
昭和60年7月 兵庫県立柏原病院内科 勤務
平成7年12月~13年6月 神戸大学医学部内科学第一講座 助手
平成8年9月~11年6月 米国 Vanderbilt 大学、Stanford 大学研究員
平成13年7月 神戸大学医学部附属病院 循環呼吸器病態学 講師
平成18年7月 神戸大学大学院医学研究科 循環呼吸器病態学 助教授
平成19年4月 神戸大学大学院医学研究科 循環器内科学 准教授
平成19年7月 神戸大学大学院医学研究科 循環器内科学 教授
平成21年4月~23年1月 神戸大学大学院医学研究科 医学研究科長・医学部長補佐
平成23年2月~30年1月 神戸大学医学部附属病院 副病院長
平成30年2月 神戸大学医学部附属病院 病院長
~現在に至る

演題「神戸大学医学部附属病院のミッション」

講演要旨：神戸大学医学部附属病院は、来年創立150周年を迎えます。附属病院は、高度急性期病院として、多くの最先端治療を行っており、広い視野を持った人間性豊かな医療人の育成を行っています。現在、卒前教育に関しては、今年（平成30年度）、医学教育分野別認証評価を受審する予定で、準備を進めています。また、今年からは日本専門医機構のもとで新専門医制度が本格的に開始されます。卒前から卒後にかけてのシームレスな教育環境を整え、将来を担う若い人材が神戸大学に集まることを目指しています。研究面では、院内に臨床研究推進センターを設置し、附属病院は臨床研究中核病院の承認を目指しています。さらに、平成29年には、がんに対する先進的外科的治療の推進、新規医療機器の研究・開発、人材育成を目指し、ポートアイランド地区に国際がん医療・研究センター（ICCR）が開設されました。医学部附属病院は ICCRC と緊密な連携をとり、がんに対する先進的外科的治療の推進、新規医療機器の研究・開発、人材育成を推進しています。

本講演会では、神戸大学医学部附属病院の教育、研究、診療の面からその課題と将来展望について紹介します。

■特別講演



飯島 一誠 (いじま かづもと)

神戸大学大学院医学研究科 内科系講座小児科分野 教授

略歴 1982年 神戸大学医学部医学科卒業 神戸大学小児科入局
 1988年 神戸大学大学院医学系研究科(小児科学)博士課程修了・医学博士
 1989年 アメリカ合衆国ニューヨーク州立大学ストーニーブルック校
 腎臓高血圧内科リサーチフェロー
 1991年 神戸大学医学部附属病院小児科医員・助手
 2002年 神戸大学大学院医学系研究科成育医学講座小児科学講師
 2002年 国立成育医療センター腎臓科医長
 2008年 神戸大学大学院医学研究科内科系講座小児科学分野こども発育学部門特命教授
 2011年 神戸大学大学院医学研究科内科系講座小児科学分野教授
 2013年 神戸大学大学院医学研究科副研究科長・副学部長・医科学専攻長
 2016年 神戸大学教育研究評議会評議員
 2016年 日本小児腎臓病学会理事長
 2017年 日本医療研究開発機構成育疾患克服等総合研究事業評価委員
 2018年 神戸大学医学部附属病院遺伝子診療部長兼任

演題「小児ネフローゼ症候群の新規治療法開発と病因探索研究」

講演要旨：ネフローゼ症候群は小児の慢性腎疾患で最も頻度の高い指定難病で、我が国では年間約1000人の小児が発症する。大半はステロイド療法によって尿蛋白が消失するが、その半数は頻回再発型/ステロイド依存性ネフローゼ症候群(FRNS/SDNS)となり種々の免疫抑制薬が用いられステロイドの減量・中止が試みられる。しかし、約20%程度の患者は、免疫抑制薬を用いてもステロイドを中止できない“難治性FRNS/SDNS”となる。我々は、このような患者を対象として、抗CD20モノクローナル抗体であるリツキシマブの有効性・安全性を検証するための医師主導治験を実施し、リツキシマブが有効であり、安全性も許容範囲内であることを明らかにした(Lancet, 2014)。この結果を受けて、2014年8月29日に、世界で初めて我が国で、難治性FRNS/SDNSに対するリツキシマブ適応拡大が承認された。本講演では、その開発経緯や医師主導治験の結果をお示しするとともに、その後の展開についても紹介する。また、病因探索研究として現在実施中の小児ネフローゼ症候群疾患感受性遺伝子同定研究についても紹介したい。

■特別講演



岩田 健太郎 (いわた けんたろう)

神戸大学大学院医学研究科 微生物感染症学講座 感染治療学分野 教授

略歴 1997年島根医科大学(現・島根大学)卒業。沖縄県立中部病院研修医、コロンビア大学セントクルース・ルーズベルト病院内科研修医を経て、アルバートアインシュタイン大学ベスイスラエル・メディカルセンター感染症フェローとなる。2003年に中国へ渡り北京国際ナショナルSOSクリニックで勤務。2004年に帰国、亀田総合病院(千葉県)で感染内科部長、同総合診療・感染症科部長歴任。2008年より現職。
 各種感染症の専門医資格に加え、漢方内科専門医、日本ソムリエ協会認定シニアワインエキスパートなどももつ。
 主な著書に、『サルバルサン戦記』、『ワクチンは怖くない』、『医学部に行きたいあなた、医学生あなた、そしてその親が読むべき勉強の方法』、近刊に、『HEATAPP! (ヒートアップ!) たった5日で臨床の“質問力”が飛躍的に向上する、すごいレクチャー』『つまりから学ぶ漢方薬構造主義と番号順の漢方学習』、翻訳本で『きみの体の中 (INSIDE YOU)』など、著書多数。

演題「感染症専門医の役割」

講演要旨：私が医師になったとき、日本には感染症医という存在がなかった。感染症は各科の医師が勝手気ままに抗菌薬を出して適当に治せばよい。そのように考えられていたからだ(今もそういう医師は少なくない)。

若手をリクルートするときは、「今なら日本感染症界で五本の指に入る存在になれるよ」と勧誘したものだ。感染症を生涯にしている医師など片手で数えるほどしかいなかったのだ。

10年前に神戸大学病院に赴任したとき、腐心したことがいくつもある。

一点目は「病院長の了解のもと」感染制御部と仲良くやっていくことだ。感染対策/制御と、感染症診断/治療は同義ではない。だが、無関係でもない。例えるならば、野球の守備と攻撃に似ている。優れた人物ならば、あるいは小規模のアマチュアチームであれば「二刀流」という芸当も可能だが、神戸大病院のような大規模な組織であれば守備の専門家と攻撃の専門家が分業するのが効率的だ。効率的だが、守備と攻撃がバラバラというのは困る。両者には異なる知識や技術があるが、連動した一連の営為であり、患者をよくし、病院をよくし、コミュニティをよくするというミッションは同じである。同様に、検査部や薬剤部、看護部とも連動し、「同じ方を向いて」仕事をするよう務めた。間違っても、大学病院「あるある」なセクション同士で反目しあい、足を引っ張り合うような幼児退行的な愚考だけは避けたかった。

もう一点腐心したのは、各診療科への営業活動だ。存在しない、存在しなくてもよいと思われていた感染症部門が、縦割り、タコソボな大学病院にできたのだ。横断的に感染症診療に介入するには営業活動が必須であった。「体を売る以外は何でもやる」精神で泥水を飲み、額を地面に擦り付ける覚悟で診療サービスに従事した。「好きなオペに邁進できるよう、どうか感染症はこっちに丸投げしてください」と営業したのだ。

専門家の能力と便利さが現場で理解してもらえば、「なくてもよいもの」が「あったほうがよいもの」に転じる。次第にそれは「なくてはならないもの」に昇華する。

華やかな大学病院のエース的存在、例えば循環器内科とか、脳外科を家の玄関や客間に例えるならば、我々感染症屋は便所のような存在である。汚物を扱い、顕微鏡で覗き、対峙する存在だ。しかし、便所がない家は不便だし、そこが汚かったり、正しく機能していない家にはろくな家はない。我々は神戸大学病院の素敵なトイレであろうと念じたのである。

感染症医のニーズが激増し、雨後の筍のように各地に感染症科、感染症医が量産される現在であっても、神戸大学病院のトイレは日本で五本の指に入るトイレであろうと、卑下しながらも自負している。

卒業式と謝恩会

卒業に寄せて ～学生から見た神戸大学医学部～

神戸大学医学部医学科卒業生 豊国秀昭 (平成30年卒)

先日、私達は卒業の日を迎え、いま医師として新たな一歩を踏み出そうとしています。これまでご指導頂いた先生方、様々な場面でご支援頂いたOBの先生方には感謝の念が尽きません。また、この会報をご覧の神緑会会員の先生方におきましては、今後とも引き続きご指導・ご鞭撻を賜ればと存じます。

さて、これまでの感謝の意を表すため、卒業式終了後に謝恩会を行い、多くの先生方にお越し頂きました。それを企画した縁でこの会報に寄稿する機会を得た訳ですが、折角の機会ですので、いち学生の立場から見た神戸大学医学部について書こうと思います。なぜなら、私は他大学の薬学部を卒業して本学に入学した、各学年5人しかいない学士編入生のうちの1人で、本学は私にとって2つ目（大学院を含めると3つ目）の母校だからです。

まず、(1)本学医学部のカリキュラムは意外とゆるいです。先生方は皆、昔はゆるかったのに今はきつくて可哀想、などと冗談交じりにおっしゃいますが、少なくとも3回生からは毎日朝から晩まで講義と実習が詰まっている薬学部に比べればルーズなカリキュラムです。次に、(2)本学医学部は自由です。特に6回生の臨床実習で世界中どこに行っても何をしても良いというのは、他大学ではあまりない内容です。

最後に、(3)学生達はバイタリティに溢れています。上述のゆるめのカリキュラムや自由度の高い実習の時間を、学生達は決して無駄にしません。ある学生達は部活動に励み、西医体で好成績を収めます。またある学生達は研究室に通い、基礎研究を行います。私も研究室に出入りしていましたが、学士編入生のみならず、多くの学生が研究を行っているのも本学の特徴かも知れません。また、6回生の臨床実習では、多くの学生が海外での実習を希望し、実際に経験します。元々アクティビティの高い学生達ですが、実際に海外実習を経験すると、更に広い視野で考えるようになったと思います。

私達はいま、神戸大学医学部のOBとなりました。日本の医学教育は変革の時を迎え、本学医学部もまさに変革中です。上述(1)(2)も、今後は変わるのかも知れません。しかし、上記(3)学生達のバイタリティは今後もずっと変わらない事を期待しています。なぜなら、これまで多くの著名な臨床医・医学研究者を輩出してきた本学医学部の伝統のひとつは、上述(3)に起因すると思うからです。神戸大学医学部の卒業生である事を誇りに思い、その名に恥じぬ活躍をできるよう、私自身もアクティブに精進して参りたいと思います。



教員と学生 (第一グループ)

卒業の日によせて

神戸大学医学部医学科卒業生 田中 佑 季 (平成30年卒)

さくらの花があちこちで咲き始めた平成30年3月27日、私たち51期生は卒業の日を迎えることができました。日本記念日協会によると3月27日はさくらの日だそうです。私たちに門出や新しい始まりを連想させるこの花を記念する日に卒業することができた偶然を、とても嬉しく、また感慨深く感じます。

神戸大学での思い出を順に辿っていくと、高校3年生の時に参加したオープンキャンパスが最初のものとして思い出されます。その際に大学での勉強、留学を始めとする国際交流、部活動などの学生生活についてのお話をうかがったことがきっかけで神戸大学に入学したいと思ったことを、今でもはっきりと覚えています。あれから約6年間の年月が経ち、授業、実習、部活などの場で様々な経験を重ねました。もちろんその全ては楽しいものではなく、辛いことや悩んだことも多々ありました。それらを乗り越えて今、自らの6年間の成長や変化を実感し、神戸大学を母校とすることができてよかったと思いま

すし、オープンキャンパスに参加していた頃の自分にも胸を張ってそれを伝えたいです。しかし、それは自分ひとりの力では決してなく、先生方や同級生、先輩、後輩のお力添えや支えがあってこそのことだったと、これまでを振り返って改めて感じます。

4月からは全く未知の人間関係の中で医師として働くこととなります。期待とともに、急に一人荒波の中に放り出されるような不安も感じます。しかし、どのような困難な時にもこの神戸大学で過ごした時間が私を支えてくれることを確信し、一生懸命精進してまいりたいと思います。

最後になりましたが、こうして私たちが6年間の学びを無事に終えることができましたのも、熱心にご指導くださいました先生方、大学生活を支えてくださった職員の方、どんな時でも見守ってくれた家族のおかげだと深く感謝しております。これからの神戸大学と神緑会の益々の発展をお祈りしております。



教員と学生 (第二グループ)



教員と学生 (第三グループ)



学生だけの記念写真



河野先生と学生



藤澤先生と学生

第38回神戸大学関係病院長協議会総会・講演会

I. 日 時 平成30年1月19日（金）15時～16時30分

II. 場 所 医学部会館3階 シスメックスホール

III. 次 第

1. 医学研究科長挨拶

2. 本学の新任教授紹介

3. 議 事

・ 議長選出

(1) 協議事項、報告事項

① 関係病院長の就任等について

② 神戸大学医学部附属病院からの報告

- ・ 地域医療活性化センターについて（平田副病院長）
- ・ 臨床研究推進センターについて（永井臨床研究推進センター長）
- ・ 国際がん医療・研究センターについて（味木国際がん医療・研究センター長）
- ・ 国産医療用ロボット等革新的医療機器の統合型研究開発・創出拠点について（藤澤病院長）
- ・ 課題解決型高度医療人材養成プログラム（実践的病院経営マネジメント人材養成プラン）について（西村副病院長）
- ・ 神戸大学医学部創立75周年・神戸病院創立150周年記念事業について（小川研究科長補佐）
- ・ 地域連携について～神戸大学病院と地域の医療機関との連携について～（掛地患者支援センター長）
- ・ 卒前・卒後臨床研修（新専門医制度登録）について（河野総合臨床教育センター長）

③ 神戸大学大学院医学研究科、医学部からの報告

- ・ 医学部入学試験状況調、入学試験合格者成績結果、週割表（平成30年度（案））及び6年次個別計画実習診療科別配属人数一覧
医学部医学科卒業時コンピテンシー

（河野医学部教務学生委員会委員長）

- ・ 大学院入学状況及び履修選択状況

（匂坂博士課程教務学生委員会委員長）

④ 県立はりま姫路総合医療センター（仮称）の進捗状況について

（兵庫県立姫路循環器病センター 向原院長）

(2) その他



藤澤病院長司会による厚生労働省佐々木課長の講演

IV. 講演会 16時30分～17時30分

- ・ 講演者：厚生労働省健康局がん・疾病対策課 佐々木 昌弘 課長

「医師の働き方改革と、それに連動する臨床研修、専門医、卒前・卒後教育改革、地域枠と医師確保について」

V. 懇親会 17時45分～19時（場所：職員食堂）

● 平成30年度神戸大学白衣授与式

式次第

午後 4 時開会

開式の辞	河野誠司 教務学生委員長
ご来賓紹介	
医学科長挨拶	横崎 宏 医学科長
白衣着衣式	
医学部附属病院長挨拶	藤澤正人 病院長
神緑会会長祝辞	前田 盛 神緑会会長
看護部長祝辞	松浦正子 看護部長
誓いの言葉	学生全員
閉式の辞	河野誠司 教務学生委員長
写真撮影	全員
閉会解散	



司会：河野誠司 教務学生委員長



主宰：横崎 宏 医学科長



待機する学生



着衣中

● 白衣授与式の感想

神戸大学医学部医学科5回生 鳥井 大輝



5年 鳥井 大輝

平成30年1月31日、私たちはとうとう「スチューデントドクター」としての第一歩である白衣授与式を迎えました。

CBTとOSCEという二つの大きな試験を無事乗り越えた私たちは、今まで机の上で勉強してきたことをいよいよ実際の現場で体験できることとなりました。

正直私は、式が始まるまでそのことの重みが、そしてこの式の意義が、あまり実感できていませんでした。

そうして始まった白衣授与式では、先生方や来賓の方々からご挨拶やたくさんのお言葉をいただきました。そして私はスチューデントドクターとして負うべき責任感というものを知り、壇上で先生に真新しい白衣を着せていただいた時には身の引き締まる思いがしました。

今までなにげなく歩いていたキャンパスも、ひとたび白衣を着ると周囲の人からは医療従事者であると認識されます。真新しい白衣の左肩にはしっかりと神戸大学の文字が刺繍されています。神戸大学の名に恥じぬよう、そしてスチューデントドクターの名に恥じぬよう、日ごろから気を引き締め、身なりや態度に注意し、勉学にもいっそう励まなければ、という気持ちが高まりました。

この文章を書いている今、臨床実習が始まって1週間が過ぎました。今はまだ本当にわからないことばかりで毎日ついていくのに精一杯ですが、優しく教えてくださる先生方から多くのことを学び、自



着衣後整列、礼



宣誓

分にできることをどんどん探して2年後立派なドクターとして認めていただけるよう精進していきたくと思います。

最後になりましたが、この白衣授与式を開催してくださった神緑会の方々や先生方、そして全ての関係者の皆様、本当にありがとうございました。

宣誓

我々医学生一同は、誠実さと思いやりの心を持って患者さんに接し、謙虚に学ぶ姿勢を忘れず、医療者としての責任を自覚し、社会に貢献できる医師を目指して臨床実習に臨むことを誓います。

平成30年1月31日 4年生一同



授与式後の記念撮影（大学教育スタッフと、のじぎく会）

平成30年度神戸大学医学部医学科 新入生歓迎合宿及び学内指導



横崎学科長あいさつ



河野教務学生委員長訓示



古屋敷教授指導



仁田教授説明

救急講習



グループ分け



心臓マッサージ説明



心臓マッサージ実施

「英語サロン」1年間の経験と今後の運営について

名誉教授 久野高義 (昭和54年卒)

私は、薬理学の教授を退職後、文科省の「世界展開力事業」の特命教授として約4年半の間、国際交流事業に関与しました。昨年(2017年)3月に神戸大学を退職しましたが、前田盛先生からの要請で神緑会の国際交流委員会委員として、「英語サロン」に約1年間出席しています。大学とは1年以上離れているため見当違いのコメントもあるとは思いますが、以下、神緑会が今後どのように母校の国際交流活動に関わって欲しいかを書きます。

1. 国際交流活動は、学部、病院、研究科の3つのレベルで行われています。この順番で書いたのは、学生の立場に立ってみると、まず学部6年次での短期留学(1ヶ月程度の海外の大学附属病院での臨床実習)があり、卒後研修の1つとしての海外病院での研修があり、同時あるいはその後に大学院あるいはポスドクとしての海外留学があるからです。
2. 1.は本学学生の立場からですが、外国からの留学生の場合も、学部学生(医学生)として本学の附属病院で実習する機会があり、卒後すぐに大学院生として留学する場合と、若手医師として最新手術の見学などで留学する場合があります。最近

では、日本人と同様、発展途上国の医学部出身者についても、卒後すぐに大学院に入学するケースが減り、若手医師として短期に医局を訪問し、それがきっかけで大学院に入学するケースが増えています。

3. このように、医学部・医学研究科の国際交流活動は、派遣についても受け入れについても2つの部局、医学研究科と医学部附属病院の密接な連携作業が必要です。特に、インドネシアやタイなどの医学部を訪問すると、一番多い先方の希望は若手医師を短期間(数か月、長くても1年)派遣したいというものです。私は、当初学部生あるいは大学院生としてしか受け入れる方法しか知りませんでしたが、資金さえあれば附属病院での受け入れは、学生よりも簡単であることがわかりました。
4. 特に、学部レベルでも大学院レベルでも学術交流協定があり、交流の歴史も長いインドネシアのトップ大学であるインドネシア大学やガジャマダ大学などから病院実習生として派遣されてくる医学部学生、優秀な学生は、そのまま大学院生として、あるいは若手医師として受け入れて、本医学部の発展に貢献してもらおうのが得策だと考えます。



左端が久野先生

また、海外大学の資金で派遣されてくる若手医師も多くは優秀です。これらの留学生が教室で行われている研究にも興味を持ち、大学院生として再来日した例も複数あります。

5. 欧米の「いわゆる先進国」からの学生は、学部学生として病院実習を希望して来神しても、観光に明け暮れて実習に身が入らないことも珍しくありませんが、上記のような発展途上国の大学からの医学生は、母校の推薦で来ているので、勉強熱心で、英語力が圧倒的に優れているだけではなく、「大人」としての人格も完成している学生も多いことは、学生を指導した教員がほぼ認めるところです。ヒジャブをかぶった異国の女子学生が英語を母国語のように話し、症例について高い医学知

識で議論する姿は、本学学生にとって強烈な刺激となるはずで

最後に

このように、発展途上国の医学部学生や若手医師を受け入れることは、本学の学生教育にとっても、神戸大学の国際展開にとっても極めて重要です。ところが、現状では、多くの場合、外国人の受け入れは医学研究科への大学院生に限定されており、医学科・医学研究科と附属病院の国際交流活動はバラバラです。学部、大学院、病院への外国人受け入れについて、これら2つの組織の国際交流活動が密に連携できるように、神緑会が資金的かつ組織的にサポートできればと考えています。



眼科学講師 楠原 仙太郎 (平成10年卒)

私が神緑会会長の命を受け「英語サロン」を立ち上げてから1年半が経過しました。そこで、これまでの活動を振り返りながら、英語サロンのこれから目指すべき方向について私なりの考えをお伝えしたいと思います。

英語サロンを始めたきっかけは前田会長からのお声かけでした。私が2年間のロンドン留学を終え帰国してしばらく経った頃に、「神戸大学では海外を目指す医学生や若手医師・研究者が少ないことが問題である」ということが神緑会で議論されていました。神緑会では国際交流活動を様々な面からサポートし

ているのですが、前田会長から私への要請は「英会話スキル向上のための何らかの活動を立ち上げて欲しい」ということでした。そこで私の頭に真っ先に浮かんだのが英語サロンでした。

私の留学していた University College London, Institute of Ophthalmology では、毎朝10時から30分間限定で集会所のコーヒー自動販売機が無料になり、ポーターが無料クッキーを運んでくれます。このような環境が提供されているので、朝の仕事を終えた各ラボのメンバー達が集まって円いテーブルを囲みながら世間話で盛り上がるのが常になっていました。留学直後の私は英会話に自信がなかったので敢えて初対面の外国人達の輪に入って必死になって会話に割り込んでいきました。そこで気づかされたのは圧倒的な英語の語彙および表現力の不足でした。例えば、「週末にマス釣りに行ったよ」と伝えたくても「マス」を英語で trout とすることを知らなければ会話にならないのです。

日本の英語教育の問題点の一つは間違いなくこの語彙の不足です。チョウチョを英語で butterfly と知っている日本人は多いでしょうが日常よく出会うダンゴムシを英語で pillbug (もしくは woodlouse) と知っている日本人は少ないと思います。また、サッ



イギリス留学

カーの話題で「同点ゴールを決める」を英語でどういでしょう？会話の相手は私が "football" という単語を知っているなら、当然、" Messi scored an equalizer in the 90th minute last night!" というくらいは理解できるだろうと考えます。つまり英会話のスキルを向上させるには、語彙や表現のストックを増やすことが必須で、そのためには英語でアウトプットする機会を増やすことが絶対に必要です（そうしないとその単語や表現を知らないことにすら気づかないと思います）。

英語サロンで行ってきたことはこの「英語でアウトプットする機会」の提供です。限られた予算と人員で始めた月1回の開催の英語サロンでしたが、勝二先生、久野先生、菱本先生、神緑会の高倉様、を含む多くの方々の支えと英会話に興味のある方や留学生が積極的に参加してくれたおかげで1年以上にわたり継続することができました。ただ、続けてきたことで見えてきた課題もあります。1つは参加人数の少なさです。ここ1年以上は英語サロンの開催場所が基礎棟の2階の一室でしたので、普段利用し

ない方には馴染みのない場所で参加しにくかったことがあると思います。この4月からは生協食堂を開催場所としましたので、より多くの方に参加いただけるのではないかと期待しています。もう1つは開催日時が限定されていることです。英語サロンは毎月第2火曜日の17時から開催されていますが、これはファシリテーターが参加可能な日程ということで決まった経緯があります。こちらにつきましてはご協力いただける先生を確保できれば開催日を増やすことを検討したいと思います。また、将来的には、大学病院もしくは医学研究科敷地内に英会話（日本語禁止）エリアを常設することも目指しています。

英語サロンの活動を通じて少しでも多くの方々の英会話スキルの向上に貢献できればと思いますので、今後とも引き続き宜しくお願いいたします。

出席者数に苦勞しながら、一年間続いた事に感謝します。学生を除いた事の是非は別として、医学研究科を代表する取り組みになる事を期待します。

(会長 前田)



左列：インドネシアからの留学生3名と中国からの留学生 右から二人目：楠原先生、三人目：菱本精神科准教授

退職にあたって

この度、28年半勤続した神戸大学を定年退職するにあたり、これまでお世話になりました皆様方に心から御礼を申し上げます。特に、新しい教室の草創期に支えてくださった教室内外の教員、職員及び大学院生の皆様、その後の教室の発展・拡大期を支えてくださった皆様ならびに定年を控えた最近の整理縮小期を支えてくださった皆様全てに深く感謝いたします。

私は、東京大学理科Ⅲ類に入学する（1971年）以前から医学研究に関する書籍を涉猟し、特に基礎医学の研究に漠然とした興味を抱いておりました。医学部医学科に進級（3年次）したばかりの生化学の講義で、当時栄養学講座教授を兼任しておられた京都大学医学部医化学講座教授の早石修先生が、Banting & BestやLesch & Nyhanの業績に触れ、「医学部学生でも世界的な仕事ができる。興味ある学生は気軽に研究室にいらっしゃい。」とおっしゃる言葉を真に受け、講義後その足で「何か研究させてください。」とお願いに行ったのが、私が基礎医学研究に入った端緒です。5年生までは、講師（途中から浜松医科大学教授）であった市山新先生のお世話になり、講義にあまり出席せずに生化学の実験をしておりました。途中3年次6～9月のフリークォーター（基礎配属実習）では、薬理学講座の江橋節郎教授のお世話になり、国際生物物理学会会長としての多忙なお仕事の合間に、毎日夜遅くまで実験に身を捧げておられるお姿を間近で拝見し感銘を受けました。

6年生になり、ちょうど、早石先生のお弟子である本庶佑先生が米国から帰国され栄養学教室の助手に就任されました。当時揺籃期であった「真核生物の分子生物学」に深い興味を抱いていた私は、その日本での草分けである先生の許に弟子入りし、当時でも非常に稀（年0～2名）なことでしたが、1977年に卒業後直接、基礎医学系の大学院に進学しました。幸いにも、ちょうど米英で勃興してきた遺伝子クローニング技術やDNA塩基配列決定法の進歩の波に乗り、beginner's luckもあって、Bリンパ球の分化の過程で起こる免疫グロブリン遺伝

分子生物学分野教授・副学長 片岡 徹

子の再編成の一つである重鎖遺伝子の「クラススイッチ組換え」の発見を成し遂げることができました。1980年2月に論文発表しましたが、同じ月、別誌に米国のLeroy Hoodのグループが、我々の次の号に利根川進先生のグループが発表と、本当に熾烈な競争でした。その後、1981年4月、本庶先生の大阪大学医学部教授就任に伴い、私を含む5名の大学院生が中途退学して大阪大学大学院医学研究科に転入学しました。当時、東京大学医学部の大学院生が在学中に他大学に異動するのは前代未聞の出来事であったらしく、教授会で大問題になったそうです。その後、大阪大学助手を経て、かねてから興味があった癌研究に従事すべく、1983年10月より、ヒトの癌の約20%の発生原因となっているras癌遺伝子のクローニングに成功した米国コールドスプリングハーバー研究所のMichael Wigler博士のもとへ留学しました。幸運にも、ちょうど同研究所で開発された酵母遺伝学を取り入れ、出芽酵母ras遺伝子の発見とその産物（Ras蛋白質）の細胞内機能（アデニル酸シクラーゼの活性制御）の解明に成功しました。この業績は、癌遺伝子産物の細胞内機能解明の最初の例となりました。また、この研究の過程で、ヒトと酵母のRasの機能互換性を証明しましたが、この業績はモデル生物としての酵母研究の隆盛の嚆矢となったと評価されています。その後、1986年2月にハーバード医科大学から招聘を受け細胞分子生理学講座のassistant professorに就任して独立した研究室を構えた後、1989年10月に神戸大学医学部生理学第二講座の教授に採用いただき帰国しました。帰国の理由の一つは、当時の米国のグラント事情が史上最悪となり、RO1グラントの競争的更新に不安を覚えたことです。帰国後は、研究材料を出芽酵母→線虫→マウス・ヒトへと変遷させながら、ずっとRasを介した細胞内シグナル伝達経路による細胞癌化のメカニズムに関する基礎研究に従事してきました。講座名も、平成13年度の大学院部局化に伴い、分子生物学分野に改称いたしました。

このように、私は、ほぼ純粋な基礎研究者である



写真1 ハーバード医科大学での筆者の研究室
中央：筆者、右：玉沖達也氏、左：田中秀穂氏



写真2
ハーバード医科大学に講演に来られた本庶 佑先生と

と自他共に認め(られ)ていたのですが、癌研究に転じた当初から、自らの基礎研究成果を画期的な癌治療薬の創出に結びつけたいという憧憬を抱いておりました。2005年になって、Ras 蛋白質の新規 X 線結晶構造の決定に成功し、それが Ras では初めての創薬の標的となる分子表面ポケットを有していたことから、このポケットに嵌入して Ras の機能を阻害する低分子化合物をインシリコ・スクリーニングするプロジェクトを本格的に始動しました。背景には、グリベック等の分子標的薬癌治療薬の有効性が証明されてきたことや、Ras の分子標的薬として期待されていたファルネシル転移酵素阻害剤の効果が全く期待外れであったことが挙げられます。幸運なことに、2011年にリード候補化合物の創出に至り、化合物特許を製薬企業にライセンスングして開発を進めましたがあまりうまくいきませんでした。その後、Ras の別の分子表面ポケットをターゲットとした新しいインシリコ創薬プロジェクトを立ち上げ、最近になってかなり強力な活性を持つ新規リード候補化合物の創出に至り、理化学研究所や SPring- 8 と密接に連携して開発を急いでおります。また、並行し

て、当教室にて発見して炎症及び炎症が関連する癌の発生に重要な役割を有することを証明した、Ras の標的蛋白質である細胞内シグナル伝達酵素ホスホリパーゼ C ϵ (PLC ϵ) の選択的阻害活性をもつ低分子化合物の開発も行い、新規作用機序を持つ抗癌薬及び抗炎症薬の候補として有望な成果を得ております。Ras の研究を始めて約35年になりますが、医薬品開発に結実する可能性がやっと現実味を帯びてきました。この過程について、本年3月16日の最終講義において「基礎研究から創薬に至るかくも長き道程」というタイトルで纏めさせていただきました。臨床応用が視野に入ってきた時に定年退職となるのは少し残念ですが、定年後も研究室の規模は縮小しながらも引き続き神戸大学にお世話になり、理化学研究所と SPring- 8 に製薬会社を加えた共同研究体制の下で研究を続ける予定にしております。

末筆ながら、選択と集中の波がますます強く押し寄せてくる、国立大学法人にとって受難の時代ではありますが、構成員の皆様の叡智にて難局を乗り切り、神戸大学、特に医学研究科・医学部が益々発展していられることを心より祈念いたしております。



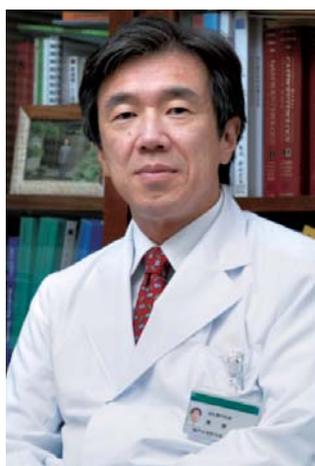
写真3 退職記念祝賀会集合写真 (2018年3月21日)

- 追悼文 -

東 健 先生のご逝去を悼む

元 神戸大学医学研究科長・医学部長 神戸大学大学院医学研究科病態シグナル学部門

特命教授 高 井 義 美 (49年卒)



東 健先生

神戸大学大学院医学研究科消化器内科学分野 東 健 教授が、ご養生の甲斐なく、平成29年4月5日に永眠されました。享年61歳でした。先生の、そのあまりにも早すぎのご逝去が残念でなりません。まだまだこれから、先生が成し得たことは沢山あったはずで

その思いを果たすことができず、さぞかしご無念であったことと思います。今はただ先生のご冥福を心から祈るばかりです。

東先生のごことは、私の医学部時代の同級生で、親友でもある千葉勉前京都大学大学院医学研究科消化器内科学講座教授から話を聞いて間接的には存じ上げておりましたが、実際に親しくご厚誼をいただくようになったのは、私が大阪大学から母校の神戸大学に異動して医学研究科長・医学部長を拝命した平成20年頃からのことでした。以来、ご逝去されるまで親しくおつきあいをさせていただきました。先生には色々本当にお世話になり、いつも心から感謝しておりましたが、この紙面において、改めて先生に対する私の敬意と感謝の気持ちを捧げたく思います。

東先生は医学と臨床に対する造詣が深く、いわゆるクリニシャンサイエンティストでした。責任感があり実に誠実な性格の方で、何事にも熱心で情熱的でしたが、一方、非常に思慮深く慎重に行動される方でした。また、新しいことを次から次に考えて提案されるアイデアマンでもありました。そしてそのアイデアを実現するためには、とことん粘り強く、誰よりも努力される方でした。私は先生の、そのようなお人柄と資質に大変感銘を受けておりました。

東先生と初めてお会いした当時は、文科省の方針で、臨床医を育成するだけの医学専門学校のような大学と、臨床医の育成と共に医学研究を行う研究大学の2群に医学部が分けられようとしており、文科省は、後者には大きな予算を措置していました。後者の大学となるためには、従来の教育・研究・臨床などの体制や運営を根本的に改革する必用がありました。すでに私の前任の医学研究科長・医学部長の千原和夫教授がその改革を始めておられましたので、私もその方針に沿って改革を進めました。東先生は、最初は副病院長として、その後は副医学科長、副研究科長、副学部長として、この改革に大きく貢献して下さいました(図1、2)。改革の一つに内科学講座の再編がありましたが、先生はそれを見事に完成されました。そして、再編後には初代の消化器内科学分野の教授として活躍されるとともに、11分野からなる内科学講座のチェアマンとして、内科学講座を大きく発展させられました。

東先生はさらに、当時競争が最も厳しかったグローバルCOE(GCOE)を、代表者として獲得されました。本医学研究科・医学部ではその前年度に片岡 徹教授が代表者としてGCOEを獲得されていたので、2つ目のGCOEの採択は難しいと思っていたのですが、東先生のユニークなアイデアに基づいた構想が高く評価され、見事採択されました(図3、東先生作成)。医学研究科・医学部でGCOEを二件獲得したのは、当時国内に80あった医学研究科・医学部の中で、神戸大学と慶應義塾大学の2大学のみでした。東先生のGCOEは彼のリーダーシップで大きな研究成果をあげ、多くの人材を育成することができました。そして、終了時の文科省の評価委員会で、大変高く評価されました。先生のGCOEの詳細を付記しています。また、東先生は神戸大学と早稲田大学との連携にも貢献されました(図4、東先生作成)。先生のこのような大きな貢献で、神戸大学医学研究科・医学部は飛躍的に発展し、全国の大学が

ら大きな注目を集めるようになりました。私は先生が成し遂げられたこれらの成果に心から感謝するとともに、先生のことを大変誇りに思っておりました。

このような大きな事業の終了後も、東先生は次々に新しいことを考え出され、その構想の実現のため努力しておられました。先生の最後の構想は、次世代スマートヘルスケア拠点形成でした（図5、東先生作成）。この拠点形成には最低30億円の初期投資が必用でしたが、先生はそのスポンサーをも探してこられ、実現に向けての会議を内々に重ねておられました。しかし、実現される寸前に病気になってしまわれ、残念ながら実現には至りませんでした。

この構想を東先生の許可なく初めて公開しますが、

この構想が、先生の遺志を継ぐ後輩の方々の手で、いつの日か実現されることを信じています。また、東先生が立ち上げられた消化器内科学分野も、その後任の児玉裕三教授が先生の大きな志を引き継いで、これからまたさらに発展させていかれることを切に願っております。先生、どうか天国から見守ってあげてください。

東先生は天国におられる今も、色々新しい構想を練っておられることと思います。その構想を熱心に語っておられる先生の姿が目に見えられます。

東先生、どうかそちらでの世界でも毎日楽しい生活を送ってください。

図1 新附属病院役員（平成21年4月）

	病院長		
		杉村	
副病院長 (経営担当)		副病院長 (医療安全担当)	副病院長 (教育・研究担当)
			
丹生		前田(深)	東
副病院長 (経営担当)		副病院長 (病床マネージメント・サービス担当)	
			
藤澤		大島	

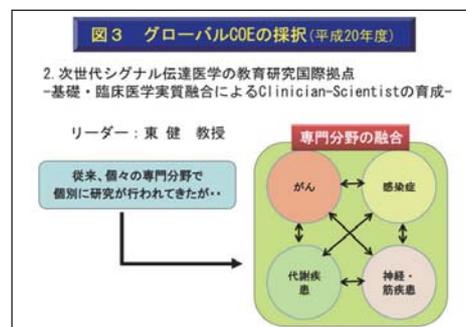
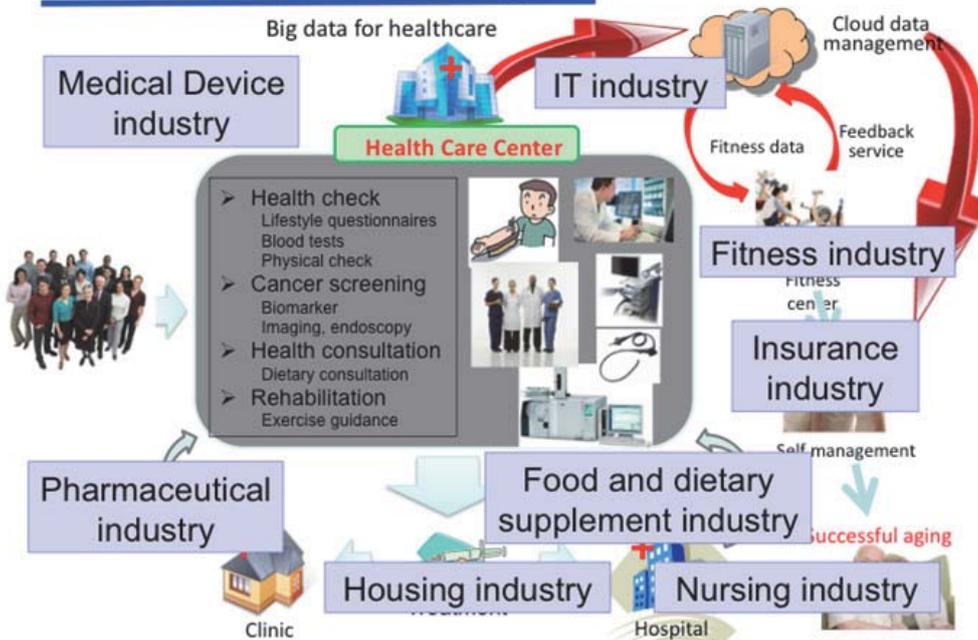


図2 医学研究科・医学部役員（平成22年4月）

医学研究科長・医学部長 (医科学専攻長・BMS専攻長)		医学科長 (副研究科長・副学部長) (医学研究科長・医学部長補佐)	
	高井		南
医学部評議員 (副研究科長・副学部長)		(副医学科長) (副研究科長・副学部長)	
	片岡		東
医学研究科評議員 (医学研究科長・医学部長補佐)		医学研究科長・医学部長補佐	
	藤澤		平田



図5 次世代スマートヘルスケア拠点形成(神戸大学医学研究科 東 健)
Next Generation Health Care System



(付記)

① グローバル COE「次世代シグナル伝達医学の教育研究国際拠点」 平成 20 年度に採択されたグローバル COE「次世代シグナル伝達医学の教育研究国際拠点」は、社会的に根本的な解決が急務となっているシグナル伝達病である、がん、代謝疾患、感染症、神経・筋疾患を対象とし、基礎・臨床医学の実質的な融合を基にした分野横断的・統合的なアプローチにより、それらの疾患が互いに関わり合う核心メカニズムを解明し、画期的な診断・治療・予防法を確立することと、また、一貫した大学院教育とテニュアトラックを中心とした若手研究者独立支援策を実施し、シグナル伝達医学において、新分野を創出し、革新的医療戦略を構築する能力を有する、次世代の医学・医療の世界的リーダーとなる clinician-scientist・医学研究者を育成することを目的として進められています(図 16)。当初の計画どおり、基礎・臨床医学の実質的な融合による新しい分野横断的・統合的な教育研究体制を構築し、これまでに、清野進教授(細胞分子医学と糖尿病・内分泌内科学)、戸田達史教授(分子脳科学と神経内科学)、的崎尚教授(シグナル統合学と消化器内科学)をはじめ

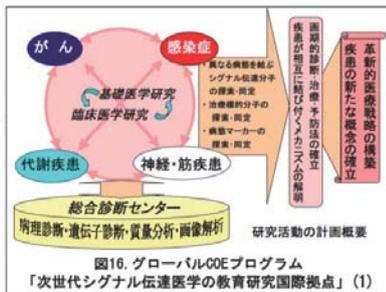


図16. グローバルCOEプログラム「次世代シグナル伝達医学の教育研究国際拠点」(1)

とする。教授 8 名、准教授 7 名、講師 1 名、助教 2 名(計 18 名)(平成 22 年

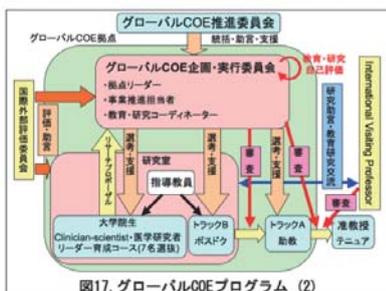


図17. グローバルCOEプログラム(2)

7月1日現在)の基礎・臨床融合教官を配置するとともに、共同研究棟改修に伴い、基礎・臨床融合研究スペースを約2500平米確保し、研究者とスペースを一体化した実質的融合システムを構築しました。また、適切な運営マネジメント体制の下、専攻・講座・分野横断型の博士課程 clinician-scientist・医学研究者リーダー育成コースと、従来型ポスト制度、およびポスト終了後の若手 clinician-scientist・医学研究者を対象にしたトラック A と B の3段階システムによる若手研究者独立支援策を確立し、活動推進を着実に実施してきました(図 17)。これらの結果、事業推進担当者若手研究者からシグナル伝達医学に関する世界最高水準の多数の研究結果が発表され、基礎・臨床医学の融合、異分野の研究者間の共同研究も進展しており、若手研究者のうち4名がすでにテニュアポスト(准教授3名、講師1名)を得ております(図 18)。平成21年12月に開催した国内の著名な clinician-scientist と海外の International Visiting Professor (IVP)等から構成される国際外部評価委員会において、大学院教育体制と内容、若手研究者育成体制、ならびに、研究成果について高い評価を得ました。よって、本計画は世界最高水準の国際教育研究拠点形成に向けて着実に進展していると判断できます。(文責：東 健)

グローバルCOEにおける担職種	氏名	現所属・職種
グローバルCOE特命准教授(教育・研究担当コーディネーター)	吉田 肇	病態疫学解析学・准教授
グローバルCOE特命助教(トラックA)	藤田 剛	消化器内科学・准教授
グローバルCOE特命助教(トラックB)	力沢 良行	シグナル伝達学・准教授
グローバルCOE研究員(リサーチアシスタント・トラックB)	原 重雄	病理診断科・講師

図18. テニュアポストへの移行

出典：http://www.med.kobe-u.ac.jp/info/2010/docs/dean_mes3.pdf

(2010年8月更新)

「神戸大学大学院医学研究科・医学部の現状と将来」3
高井義美

松本 悟先生を偲ぶ会

脳神経外科教授 甲 村 英 二



松本悟先生は、1971年に神戸大学脳神経外科初代教授として着任された後、多数の後進を育成して教室を発展させるとともに、我が国の小児脳神経外科領域の確立・発展に多大な貢献をされてきました。2017年11月7日に松本悟神戸大学名誉教授は肺炎のためご他界されました。

松本悟先生は1927年のお生まれで1945年に海軍兵学校を卒業されました。終戦は兵学校で迎えられ直接戦地にはいかれなかったそうです。その後医学の道を志し、京都大学医学部を1954年に卒業されました。京都大学では荒木千里先生の教室に入られ脳神経外科医の道を歩みだされました。学位を得られたのちに、1962年に米国シカゴのノースウエスタン大学に留学されました。そこでは Raimondi 先生（小児脳外科の大家）との出会いがあり松本先生のその後の脳外科人生が方向づけられました。Raimondi 先生のもとでチーフレジデントをされた後、1962年にドイツマックスプランク研究所に移られ、Zülch 先生のもとで実験脳腫瘍の研究をされました。1968年に帰国され、京都大学、北野病院での勤務の後に、1971年9月に新しく創設された神戸大学脳神経外科の初代教授として着任されました。当初は7人でのスタートであったと聞き及んでいます。松本先生の指導の下に教室は発展していきました。手術用顕微鏡の導入、CT、MRIの導入など脳外科診療が目覚ましい発展を遂げていく時代であったと思います。脳神経外科にはいろいろな分野がありますが、松本先生は留学時の Raimondi 先生との出会いから、小

児脳神経外科を柱として教室を作り上げてこられました。松本先生は我が国における小児脳神経外科の父といっても過言ではありません。国際小児脳神経外科学会（ISPN）の設立に深くかわり1973年に第1回 ISPN を会長として東京で主催されました。1974年に第2回日本小児神経外科研究会の会長を務められたのをはじめ、以後多くの学会を主催されました。学内においても、附属病院中央手術部長、神戸大学評議員、附属病院救急部長などの要職を歴任されました。

1991年3月にご退官されましたが、退官後も1993年に日本二分脊椎・水頭症研究振興財団を設立して、小児脳神経外科領域をライフワークとして、研究の振興、啓蒙活動など幅広くご活躍されました。私は2002年に神戸大学に着任しましたが、松本先生からすればわたくしの至らぬ点がさぞ目についたであろうと思いますが、特に小言を言われるでもなく、指示を出されることもなく、温かく見守っていただきました。毎年12月に脳神経外科同門会総会の場で、毎回格調高いご挨拶ののちに乾杯のご発声を頂くことが同門会員にとって1年の締めくくりでした。

2018年2月4日に「松本悟先生を偲ぶ会」を開かせていただきましたところ、多数の方々にご臨席いただき、思い出やエピソードなどの紹介もあり、あらためて松本悟先生のご功績、ご人徳に触れることができ、その偉大さに深く感銘を覚えました。松本悟先生に心よりの感謝と哀悼の意を表します。

75周年記念一

神戸大学医学部75周年記念 座談会 (第2グループ)

日時：2018年2月10日(土) 14:00~17:00
場所：神緑会館 研修室1・2

出席者

神緑会会長 前田 盛 (46年卒)

神戸医科大学

藤谷 哲造 先生 (37年卒)	水野 耕作 先生 (37年卒)	老畑 宗忠 先生 (38年卒)
西村 亮一 先生 (38年卒)	木村 浩 先生 (39年卒)	中村 肇 先生 (39年卒)
杉原 俊一 先生 (40年卒)	西岡 正登 先生 (40年卒)	吉田 祥二 先生 (40年卒)
守殿 貞夫 先生 (41年卒)	山村 武平 先生 (41年卒)	大賀 祐造 先生 (42年卒)
田中 邦彦 先生 (42年卒)	谷山紘太郎 先生 (42年卒)	



西岡 それでは、始めさせていただきます。私は昭和40年卒の西岡でございます。内科です。今日は本当にお寒い中、また、特に足元が悪くなった中をお集まりい

ただきまして、ありがとうございます。

今日は、神戸大学医学部75周年、来年の4月になるのですが、そのときのための神緑会の座談会をしてほしいという要望がございまして、昭和30~42年卒までが座談会の対象になっておりまして、第1グループとして昭和30~36年卒の方が座談会を持たれます。

進行としましては、前田会長のご挨拶と趣旨説明を頂きまして、引き続き、今日出席の皆さま方の自己紹介を1~2分をお願いし、それから、進行表の座談会の話題に入ってまいりたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。私はこういうものは初めてですので、あまりうまくいかないかも分かりませんが、本日は録音して、それを原稿に起こしますので、その時点で皆さま方に校正をお願いします。

それでは、前田会長、お願いいたします。

冒頭挨拶
会長挨拶・趣旨説明

前田 皆さん、お集まりいただきまして、どうもありがとうございます。今、西岡先生には、縷々、いろいろなことが決まっているようなことで報告いただいたのですが、必ず

しもそうではありませんで、実は1月に第1グループの座談会が行われる予定だったのですが、都合で3月3日になっております。

60周年のときに、医専の24年卒から医大の29年卒までお集まりいただきまして意見を交換しました。この時期に記録しないと残らないだろうというようなことなどがありまして、非常に皆さん協力していただいたので、いろいろなことがしっかり記録に残っていると思っています。

もう一つ大事なことは、50周年の記念誌に出てくる神緑会というのは、十数ページの話だけで、基本的にはこういう記録は大学が発行することになっております。国立移管になったときに「神戸医科大学誌」が発行されていて、座談会が行われていますが、卒業生を対象としたものとしては行われていないということです。今回、特に神緑会の構想としては、前の積み残しの昭和30年から、今年卒業するところまで座談会をして、ただ、それをどのように記録に

残していくかということについては少し議論があると思いますし、皆様のご意見を集約しながら残していくようにしたいと思っておりますので、どうかよろしく願いいたします。

医学進学課程

西岡 座談会の順番としては、医学進学課程の話から入りたいと思います。話題を提供できる方は、すみません、挙手をしていただきましたら順番に。では、水野先生からよろしく願いいたします。



水野 学問的なものはないのですが、いわゆる時代背景としまして、私は31年に姫路の進学課程に入りましたが、そのときにちょうど姫路城の昭和大改修が始まったのです。

それからすっぽりと姫路城が幕で被われ、それと同時に姫路市も何か元気がなくなったなという感じがしました。

それから、もう一つバックグラウンドとして、ちょうど蒸気機関車のころでした。私は明石市から姫路に通っていたのですが、蒸気機関車から煙が出て、曾根のあたりにちょうどトンネルがあるのです。昔

ながらのいい思い出が残っております。バックグラウンドとして説明させていただきました。



藤谷 今日ご出席の皆さんは姫路の方が多くのように思いますが、私は篠山で予科を送りました。あの当時、ちょうど何とか連隊何とかと書いてありましたが、陸軍の駐屯地にな

っていまして、まだ建物が陸軍の兵舎そのまま、2階建ての木造で、運動場だけはだだっ広くて、そこは農学部と獣医学部と医進課程という形であったと思います。

他の農学部の学生たちと一緒にになりまして、いきなり入れられたその兵舎の2階建ての木造の建物には農学部の同級生と一緒におりましたが、私は終戦のときは小学校2年生で、いろいろとその後も苦労があったのは事実なのですが、あの兵舎に入ったときの寂しさというのは、たまりませんでしたね。何も飾り気がないし、寒いし、篠山ですから、4月まであの年は雪が積もっていたと思うのです。そういう所に行って2~3カ月でもう辛抱できなくなって、町の中の、今は近又という大きな旅館になっていますが、そこに下宿をさせてくれとって高等学校の1年上の方と一緒にそこにいて、とにかくやんちゃ



させていただきましたね。めちゃくちゃ酒は飲むし、水野先生はよく知っていると思いますけれども(笑)。一升瓶を下げて雪の降る町の中をぶらぶらして、飯屋に行っているいろいろなものを食べたり、町の中で騒ぎまわったりして、非常にやんちゃな生活をさせていただいて、これこそ大学生の人生やと思って、ものすごく楽しかったですね。

そのとき予科は篠山と姫路にありましたけれども、確か篠山は40名で、姫路が30名、本校の医学部に入るときにあと10名追加の人があったと思います。高等学校の先輩も獣医学部に入っていました、そこから神戸医大の方へ受験して通ったという方もいました。その人もラグビーをやっていたもので、私はその人に引っ張られて、篠山から、農大でラグビーをさせてもらいましたが、その当時、とにかくみんな汚い格好をしていましたね。獣医学部の先輩たちの汚い、ドロドロの臭いジャージーの中に頭を突っ込んでいくのが嫌で、気持ち悪かったのですけれども、反対に言えば、ものすごく経験できないような予科を送ってきたと私は思っています。

姫路工大の方の医進課程の試験は、2週間ほど後にあったと思うのです。篠山と姫路とは試験の日が違ってましたね。姫路の方にも一応願書を出して、1日目の試験を受けたところで篠山の方が通ったぞという連絡があって、「それやったらもうやめや」と言って、2日目はもう遊んでふらふらしていました。そういう思い出が予科にありますね。

西岡 ありがとうございます。38年卒の先生、どなたかありませんか。予科の話。



老初 今、篠山の頃の話が出ましたが、多分、姫路も似たようなことではなかったかと思うのです。と申しますのは、ご存知のように姫路は30名ぐらいの小人数でした。少人数

だったからよかったのではないかと思うのですが、皆が親しくなりました。私はあのとき本当の生涯の友達ができたと思っています。今でもその時の友人が色々なことに意見をくれますし、また、私からもそのようにしてきました。姫路の医進課程の仲間30名は兄弟のように付き合いしてきました。若い方に倫理の講義を依頼されたときの話の中で、こ

の経験から、「友をつくれ、本当の友人は財産になるのだから、できるだけ良い友達を沢山作れ」と言っております。

その友人が篠山の皆様と一緒にあって、又受験を受けて入ってこられた10数名の方々との間にも同じような経緯で本当の友人を沢山作ることが出来ました。

いささか問題なのは授業にあまり出席しなかったことです。私は当時パソコンなどない時代でしたので、タイプライターを習いに、又自動車免許を取得にそれぞれ学校へ通いました。さらに何人かの仲間とダンス教室へ、そして夕方には剣道を習いに、後に兵庫医大病理学教授になられた故 窪田先生と警察道場にも通いました。それぞれがまだ色々な事をされたようです。そして時間があればよくソフトボールをしていました。30人クラスで欠席者、女性、そして習い事、あるいはマージャンをしている者を除いて不思議と2チーム出来ていました。上手に時間を作っていたのでしょうか。そういう余裕があったということで、きっとそれは篠山でも色々似たようなことがあったのではないかと思うのです。そして、夕方時間が出来ると、当時はやった「歌声喫茶」といわれる所へも仲間同士でかけて行き、大声で仲間と合唱したものです。(カラオケの出現する前の時代です。)また、春、夏の休暇には仲間とさそわれて旅行に行きました。冬はスキーです。時間的余裕はあるが小遣いがあまりないので、常時いわゆる無銭旅行に近い状態でした。青森から姫路まで普通列車で帰ってきたこともあります。でも、そのようなことで良き青春時代を過ごさせていただき、良き友を得たと思います。



西村 老初君と同級生の西村亮一です。私は篠山で18歳と19歳を過ごしたのです。これは変なところにいるよりも、あのど田舎のひなびたところで好き勝手やった、本当に一生の中で人間形成に一番よかった時期ではないかと思ひます。老初先生が言われたとおり、もちろん友達もよかったし、楽しい2年間を過ごしたわけですが、特に兵舎の壊れたような、寂しくなるようなところでしたが、ただ、ピアノが1台あったのです。卓球台もありました。そのピアノで同級生の和田勇

一生の中で人間形成に一番よかった時期ではないかと思ひます。老初先生が言われたとおり、もちろん友達もよかったし、楽しい2年間を過ごしたわけですが、特に兵舎の壊れたような、寂しくなるようなところでしたが、ただ、ピアノが1台あったのです。卓球台もありました。そのピアノで同級生の和田勇

君あたりと非常によく遊びました。僕はフルートをちょっとやるので、当時、あの間に非常に上達したような気がいたします。和田君が作ってくれた曲を2人で合奏したりして、本当に楽しい思い出がいっぱいあります。何もなかったころでしたが、自然は豊かだったし、人間形成の上ではあの2年間はよかったなと思っています。

木村 皆さんから今、姫路で楽しい思い出、あるいは友達ができたという話がありましたが、確かに姫路のときの仲間は今でも非常に話しやすいし、いい仲間ができたと思います。ただし、私は神戸から汽車で通っておりまして、向こうで遊ぶという時間があまりなかったの、皆さんが思っておられるほどの思い出はないのです。下宿にでも入って本当にそういう青春時代を過ごせたらよかったなと、今、お話を聞きながら思っている次第です。

杉原 私も篠山で、聞いていますとちょっと数が少ない、3人ですか。私は宝塚に住んでいたもので、下宿半分、通学半分みたいな生活をしておりまして、あの当時、福知山線は単線で、しかも汽車ぽっぽで、しかも宝塚から三田へ抜ける間は小さいトンネルがいっぱいあるのです。だから、トンネルに入るたびに窓を閉めないで煙が入ってきたことを覚えております。そして、あのころはまだ食糧配給の時代で、米が自由販売でなかったと思うのです。だから、担ぎ屋さんというのですか。三田へ闇米を買いにいった、それを都会で売ることが結構職業になっていたみたいで、米俵をいっぱい列車に担ぎ込むというような人たちと一緒に、ずっと通学しておりました。

ご存じかも知れませんが、篠山というのは城下町なのですよ。福知山線は篠山口というだけ離れたところにしか駅がないので、なぜかということを知りたいなら、昔は鉄道が走るということを忌み嫌う風潮があって、あえて篠山町は列車の通ることを反対したので、だから篠山口から篠山町までまたバスで20分ぐらい走らんといかんという変な立地にありました。篠山という町は本当に城下町のいい町で、今でも観光的に非常に好まれていると思うのです。西村先生はあのお城の近くの下宿でフルートを盛んに吹いておられて、それがものすごく雰囲気がいいなということで、私も下宿に伺って聴

かせていただいたようなことがございます。

そういうめったにできないようないい経験を2年間させていただいたということと、自然に親しい友達がたくさんできたということも同感でございます。私の医進課程に関してはそういう感じでした。

吉田 医進課程のことで、私は今でも大変感謝しているというか、ちょっと思い出がありますのでお話しさせていただきます。私はおやじの仕事の関係で高知で高校を過ごして、そのときには姫路に神戸医大の医進課程があるということも知らなくて、こちらへ来て、たまたまそれがあるということで受けて合格しました。医進課程に行こうかということでもかなり迷っていましたが、ちょうどおやじの勤めていた病院に昭和26年卒の産婦人科の小林正義先生という方が勤めておられて、おやじがその先生に相談したらどうかということでご相談いたしました。ちょっとご紹介しますが、まだ神戸医大ができてそうたつてはないが、今後の発展性とか、それと私にとっても地元だから選択肢としていいのではないかとアドバイスを受けて、それがきっかけで姫路の医進課程に行ったような次第です。小林先生には適切なアドバイスを頂き、今でも感謝しております。

それと、先ほどからお話がありましたが、篠山の方は皆さん、かなりの方が向こうで下宿しておられたようですが、姫路の場合は、西岡先生をはじめ、通学されている方が半数ぐらいいたでしょうか。私は賭け付きの下宿に2年いたのですが、特に印象に残っているのは、下宿されている方はよく遊びという感じで、通学されている方は非常に勤勉な方が多いという印象を持っていました。そのころ私の学年で、試験になるといつも満点近い点を取っていたのが3人おりました、名前を出していいかどうか分かりませんが、外科に行かれた大柳君、それから内科に行かれた谷口君、それから小林克也君、この3人は飛びぬけてよくできていたのを今でも覚えております。

もう一つは、三羽がらすと言うと何ですが、30人の本当に少ない人数の中に、私を含めて吉田が3人もおりました、またそれが本学へ進んで後、放射線医学教室に3人一緒に入りました。みんな自分の意思で入ったのだと思いますが、入りまして、今までずっと、私がこちらに移ってから毎年皆で集

まって、年に一度会食しているような長い付き合いが続いております。

杉原 ちょっと篠山のこと追加させていただきますと、前回、60周年の座談会のときに、篠山のことよく話が出てくるドイツ語の竹内先生ですか。非常に存在感のある先生で、私もその先生にドイツ語を初めて教わりました。とにかく当時は、医者になるためにはどうしてもドイツ語を知っておかんといかんというぐらい、ドイツ語はウエートを占めておりましたし、高校では英語しかやっていなかったの。そのころ、われわれも竹内先生のことを「坊主」「坊主」とよく言っていたのですが、禅宗のお坊さんで、しかもドイツ語を教えられていた。随分長くここに勤めておられたのだなということも、この座談会の記録を見て分かりました。ちょっと追加で、すみません。

谷山 ここにおられる先生方はほぼ、篠山と姫路に分かれて教養教育を受けたのですが、ポイントは前田先生の学年で国立移管と連動したので、篠山、姫路とか、外部からというのがなくなったと思うのです。ちょうど前田先生のときからではないかと思うのですけれども。

前田 39年に国立移管してまして、僕は昭和40年に入学試験を受けたのです。だから、神戸大学として試験があったのは僕の学年が初めてなのですが、僕の一つ前、45年卒は篠山と姫路で入学試験があって、ただし、入学してからは鶴甲で教養がスタートしています。

谷山 だから結局、ちょうどここにいる先生方の年代がポイントなのです。

守殿 43年から神戸大学卒ですね。先ほど農大と篠山のことを藤谷先生が言っておられましたが、私は姫路なのですが、3年生に上がる時の春の合宿からラグビー部に入って、直ぐに篠山市内の蟠竜庵というお寺で合宿をしたことをものすごくよく覚えております。合宿最初の夜に先輩の和田収平先生にシコたま酒を飲まされたのが一番強烈な印象として残っています。

それと、兵庫農大の方が少ないのであえて言いますが、こっちに来てみんな一緒になったときに、や

はり田舎育ちと都会は違うなと（笑）。やはり18歳、19歳のときに篠山を経験すると、ちょっと何か土のにおいがする、そんな変な印象がありました。

ただ、ラグビー部には農大出身の人が多く、専門に行ってからお付き合いが長かったもので、先輩の和田先生も含めて篠山出身の人たちは結構元気だなという印象がありました。それだけちょっと付け加えさせてもらいます。

山村 僕は教養は姫路なのですが、印象に残っているのは、クラスで劇をやるということで、タイトルは忘れましたが、戦後間もなく、南洋のジャングルで、戦争が終わったことを知らずに日本兵が残って、土地の人たちともいろいろと交流がありながら、日本軍のことを述べているような劇だったのですが、それをやりだしてみんなが非常に盛り上がったな。その劇の最終のときに、現地の人々の歓喜の歌を歌うのですが、そんな現地の人々の歌を、同級生のリョウ君という、今はシバ君ですが、彼が何か上手く作ったのですよね。それをみんなその辺の、舞台裏にある机などを太鼓の代わりにたたきながら一生懸命大きな声で歌ったら、それが真に迫っていたと言われて、それが非常に印象に残っているのです。その録音とか、もちろんビデオもないですし、あれがあれば非常に思い出として残ったのになと、そういうようなことを思い出します。

大賀 42年卒の大賀です。先ほど水野先生がおっしゃったように、私どものときも姫路城はまだカバーが掛かったままで、2年間いる間、一遍も見たことがありません。大分たってからわざわざ白鷺城を見に行った記憶があります。

それと下宿先から大阪へ帰るのにさすがに蒸気機関車ではなく、電気機関車になっていましたが正味1時間40分かかりました。

姫路での部活は老初先生と同じで剣道をやっていましたので、篠山の農大に行って交流試合をした思い出があります。

それからここに姫路の医進課程の時の大学祭の時のセピア色に変わった写真があります。後ろに思い出の校舎などが写っていますので、ご覧ください。

田中 42年卒の田中邦彦です。私は兵庫農大の医進課程の試験を受け、合格通知をもらったので、下宿

探しに農大に行きました。そうしたら中2階みたい
なところで、「ここに以前いた人は農芸化学から京大
医学部へ入りました」と家の人が非常に自慢気に僕
に言ったので、えらいところへ来てしまったと思い
ました。考えてみると私は田舎育ちですから、兵庫
農大もいいな、やっと親から離れて自由気ままに生
活できると喜んでいました。ところがその後、姫路
工大の合格通知が来ました。兄弟も多いし、加古川
から通学できるから姫路へ行けということで、姫路
の医進課程に行った次第です。

ですから、先ほど言われましたように、姫路工大
の医進課程の方は、通学者もたくさんいます。下
宿している人と半々ぐらいだったと思います。下宿
している人は飲む、打つ、買うを自由自在にして楽
しくして、酒を飲むときは姫路市内で飲んだり、三
宮まで行ったりということで、非常に仲が良かった
と思います。私ら通学の学生は家に帰らないといけ
ませんので、そういう枠の中からちょっとはみ出て
いたと思います。通学組は親しくなる度合いが、少
なかったのではないかと思います。隣の大賀君達は
自由に泊まり込んだり、一緒に何か食べたり、お金
はあまりなかったですけれども、そういう生活を送っ
ていたと思います。

西岡 西岡です。私も姫路だったのですが、あのこ
ろは姫路の教養課程というのは、姫路工業大学の学
生さんが1年か1年半ぐらいでやることを、医学部は
2年でやっていたということで、非常に時間的な余
裕がありました。私も通学しておりまして、父が国
鉄の職員だったもので、非常に定期代が安いとい
うことで、それと私自身がどちらかというと寂しが
り屋で、家から離れたことがなかったということで通
学をしていたと。

思い出に残るのは、あのころに、生まれて初めて
徹夜というものを経験したのです。何のことかとい
うと、ウニの発生を観察だったと思いますが、一晩
中ずっと見とかないかんという実習がありまして、
生物の実習だったのですが、それで徹夜した。それ
が生まれて初めての徹夜で、徹夜というのはしんど
いもんやなと思ったことですね。

それから、姫路の医進課程が終わって最後の日に、
ずっと通学していたのですが、一度自転車で帰っ
てみたらどうかということをかねがね思っておりま
したので、多分、吉田祥二先生の、中古のもう使わな

くなった自転車をもらったのですね。終業式の日
に姫路から、お昼から6～7時間かかったと思いま
すけれども、須磨の家までそれで帰ったという思い出
があるぐらいですね。あとはあまり覚えておりませ
ん。そういうことでした。ありがとうございます。

インドネシアの医学調査隊

西岡 インドネシアの医学調査隊について、これも
触れておかなければいけないことだと思うのですが、
まとめてお話をしていただける方はいらっしゃいま
すか。取りあえず私がこれを話題にするに当たって、
『人と村と国と』という、「神戸大学・インドネシア
交流の30年」という副題が付いた本が、朝日新聞出
版サービスというところから1996年1月に発行され
ています。この巻頭の言葉を須田勇先生がお書きに
なっておりまして、絶賛されている本なのですが、
これを読みまして、まとめてきたものから入ってい
きたいと思います。

1964年(昭和39年)から1970年(昭和45年)の
7年間、第1次から第5次の調査隊が派遣されてお
ります。これがひいては医学研究国際交流センター
(ICMR)、今、神戸大学にあるのですかね。それに
つながっておりまして、インドネシアから始まった
ものが、タイ、ミャンマー、シンガポール、フィリ
ピンと拡大していております。

この発端は、昭和39年卒の森英樹先生と、私たち
の同級生の松本克彦君(当時学生)の2人が世間話
で「どこか外国に行きたいな」という話から始ま
ったということです。1964年に派遣されているので
すが、その年の2月に神戸医科大学東南アジア医学研
究会という、このとき2～3人でこういう会をつく
ったのだと思います。それをつくりながらも7月にも
う早々とインドネシアに行っているのです。5～6カ
月の間に準備を整えるのに、非常に苦勞したとい
うようなことが本には書いてありました。

私の同級生の戸沢君もそれに加わっておりまして、
月に何回も東京へ行ったりして、あのころの東京に
行くのは大変だったと思うのですが、非常な努力を
してそれを立ち上げた。学内からも遠藤中節学長他、
多くの教授、辻先生の名前も出ておりました。ほと
んどの教授の先生の名前が出ておりました。その先
生方の協力を得て、さらに当時の政府関係者、国会
議員ですね。そのときは大平正芳外務大臣、海部俊

樹官房長官、その辺のところへ話を持って行って資金集めなどをして、何百万円かの金を、その当時の何百万円といったらかなりのお金なのですが、隊員一人一人も10万円ずつのお金を自分で出して、そういうものを作って行ったという経歴です。

第1次は、1964年（昭和39年）ですが、この年は東京オリンピックの年です。このときは新幹線もできております。阪神タイガースが優勝しております。この年に戸田嘉秋隊長他、7名。ロンボク島で2週間の診療を行っています。

第2次は、1965年（昭和40年）ですが、7月12日から9月25日まで。今度は堀田進隊長他、8名。スマトラ島へ3週間行っております。

第3次は、1966年（昭和41年）7月9日から9月22日。堀田進隊長他、8名。これには守殿先生も参加しておられます。西ジャワで診療活動を行っております。

第4次は、1968年（昭和43年）、堀田進隊長以下、10名。東ジャワ、スラバヤへ行っておられます。

第5次は、1970年（昭和45年）1月12日から2月28日。堀田進隊長他、2名。東ジャワ、スラバヤ、デング出血熱の研究。堀田先生が行かれたのは、多分、微生物学的な研究の拠点になったのだと思います。

インドネシアの医学調査隊による最大の医療協力は、西ジャワ中央総合病院というものがあつたのですが、そこの中央検査室を開設したことで、1967年（昭和42年）に海外技術協力事業団（OTCA）を通じて、神戸大学医学部医療協力調査団がインドネシアに派遣されて臨床検査室の設立が決まった。これがインドネシアにおける最大の近代的な検査室になったという、一番大きな成果だと書いてあります。

この医学調査隊の活動とは別に、整形外科教室からも行っておられまして、柏木教授がインドネシアを訪問して、整形外科領域の交流を始められた。これが1965年です。これに対して、教授はインドネシア政府からナラリア勲章を授与されておられます。

神戸大学医学部はその他に、JICAの「熱帯疫学」、それから「医科学技術」の研修を請け負っております。1973～1982年の10年間に東南アジアからの延べ46名にわたる医師の研修をやっております。

1977年、文部省の学術審議会より当時の発展途上国との学術交流の必要性が提唱されまして、その医学部門の拠点校に神戸大学医学部が指定されてお

ます。これも大きなことです。

1979年（昭和54年）に「神戸大学医学部附属医学研究国際交流センター」が発足し、その後、インドネシア、フィリピン、タイ、シンガポールの各国間で留学生の受け入れなどの学術交流が頻繁に行われるようになったという歴史があります。

では、第3次で行かれた守殿先生。よろしくお願ひします。

守殿 私は第3次で行かせていただきましたが、堀田先生が隊長で、もう亡くなられましたが宮崎吉平先生が副隊長でした。私はインターン時代のことで、第2病理で学生時代から組織の切片切りなどでアルバイトをしておりましたので、そういう関係もあって宮崎先生からお声が掛かって隊員の一人として参加することになりました。会計とマネジャー役をやらせていただくような形で行きました。

行く前の数カ月は、神戸市内のセンター街とか、元町本通りにある大上鞆店とか商店を訪問し、寄付を頂きに行きまして、結構出していただきました。

そういう形で準備をいろいろとしまして、隊員のうち、先生方は飛行機で行かれまして、歯科の佐本先生インターンの私、あと学生であった岡本先生、松永先生の4人は貨客船で、荷物と一緒に10日かかって船で行きました。香港で一晩陸へ上がりまして、そのときは結構楽しい時間でありました。船中の夕飯だけは船長さんなどと一緒に食事をしていました。ビールが1本ずつ出るのです。飲まない人のものはみんな私は集めて飲みまして、ものすごく揺れる日もあつたのですが、船の中の食事はものすごくイメージが残っていて、懐かしく思い出します。

向こうに着いて、8月4日から27日までの間、マジャレンカといひまして西ジャワですね。バンドンの近くなのですが、そこで患者さんを診察して、ついでといひますか、本分かも分かりませんが、採血させていただく。デング熱や黄熱病の血液サンプルの採取は一つは目的といひますか、そういうこともさせていただきました。

マジャレンカには地方性の甲状腺腫があつて、本当にものすごく大きいんです。それについては宮崎先生が書かれた論文に詳しく書かれてありますが、原因については結果的には飲料水か、生活習慣によるものか、最終的には原因は究明できていなかったようです。

当時はちょうどスカルノ大統領が失脚した次の年ぐらいだったと思うのですが、インドネシアに行って1カ月ちょっとですが、1カ月半ぐらいおりましたか、いろいろいい思いをさせてもらいました。マジャレンカの近くにセレメ山という3078mの山があるのですが、そこへ当時学生だった岡本先生、松永先生と私の3人で、軍隊にお供してもらって、3078mを登ったのを覚えております。

少し話は変わりますが、われわれは第3班でしたが、異国の地で9名の団体生活をしていまして、いろいろと複雑な心情に陥ったり、結構精神的に不安定になったりということがありました。第2回の調査隊は、途中で分裂しかけたとか、そんな話もあるぐらいで、私らも怪しい雰囲気になったことが思い出されます。

それと、敗戦後、インドネシアに残られた方で志田さんという方がおられまして、その方が通訳ですと付いてくれていまして、いろいろお世話になったことを覚えております。以上です。

西岡 はい、ありがとうございました。はい、水野先生。

水野 この調査団とは別に、整形外科をインドネシアにつくろうということが発端になって、柏木大治先生が努力されました。われわれも一般外科から分かれた整形外科ですが、私らのころはもう柏木先生が十分整形外科というものをやっておられましたが、そのころはアジアには整形外科が本当になかったわけですね。それで、外傷の多いのはどこだろう、軍隊だということで、陸軍病院と親密な関係を付けられて、それから長らく交流されました。

それで、柏木先生自らインドネシアの病院に行かれましたが、そのときに2人か3人若い医局員を連れて行かれるのです。木村先生も行かれたと思うのです。私も行きました。それで、熱帯ですと暑いのですよね。もちろんエアコンなんてあるところではありませんし、病室が開けっ放しなのです。ただ、ハエをよけるために網戸があるぐらいで、整形外科から見ると非常に不潔そのものなのです。インフュージョンしたらいけませんので、それを整形外科として教えるのに一生懸命になられましたね。それで、陸軍の兵隊を、一種の軍医ですが、軍医を神戸大学の整形外科に留学させて、そして教育してと

というのが、確か10年ぐらい続いたのではないかと思います。そして、彼らが帰って偉くなって、整形外科というものを確立させて、立派にやられています。その功績を残されたのは柏木先生だと思います。

余談ですが、柏木先生と一緒に行きまして、香港に一晩泊まったのです。香港はそのころ治安が悪くて、スリがすごかったのです。柏木先生はそのころドルを一生懸命ためられて、そして、持っていこうとされたのですが、スリに全部やられたのです。それで、今後どうしよう、往路だったですからね。もう一人、私と5～6年下の者と一緒に行きまして、遊べるわと思っただけで、お金がなかったもので、もう仕方なしに病院ですべて仕事をしました。それで帰ってきたという思い出があります。柏木先生はじめ医局員はインドネシアに対して非常に熱心だったということをつけ加えさせていただきます。

西岡 はい、ありがとうございます。木村先生。

木村 私は柏木先生と一緒にではなくて、1年先輩の藤田久夫先生と私と、それから石川斉先生の3人で行きました。学術的な問題ではなく交流ということで行きました。既にインドネシアの陸軍中央病院の方から将来整形をやりたいというドクターがこちらに来ておられまして、その方たちと一緒に陸軍中央病院を中心にしばらく見学させてもらって、その後、バンドンとかスラバヤとかを回って、最後に少しだけバリ島を観光させてもらって帰ってきたということで、あまり学術的な交流はなかった（笑）。

西岡 ありがとうございます。それでは、時間も押してしまっていますが、もう少しお付き合いいただきたいと思います。

国立移管の件

西岡 次に、国立移管のことはやはり触れておかなければいけないということで、取りあえず移管の経緯だけ、調べたことを述べさせていただきますが、引き金となったのは、やはり県の財政問題だったようです。昭和26年ぐらいから県立大学の在り方についての検討が始まっていたと。私らが入るずっと前からですね。昭和29年、兵庫県が県立大学の国立移管の意向を初めて表明しております。昭和33年、文

部省が神戸医科大学とともに他の県立の10大学の実態調査を開始しております、この年に六甲ハイツが、県の所有地だったものが米駐留軍の接收に遭っていたのですが、それが返還されて兵庫県が神戸大学に譲渡するという事で国立移管がスムーズになったと記されております。

昭和35年の2月に、武田第1解剖教授を議長とした「国立移管促進合同委員会」が設立されて本格的な動きになり、兵庫、山口、岐阜の3県立大学の移管が、3県の国会議員の協力を得て行われております。当時の国会議員は、兵庫県は砂田重民氏、山口は岸信介氏、岐阜は大野伴睦氏、大物議員さんですが、この3名の力がかなりあったのではないかと思います。

そして、昭和39年、神戸大学医学部設置が決定されております。それまで神戸医科大学のときに、神戸医科大学は県の住民を優先的に入学させているというような批判もあったという記録も残っております。

その後、昭和39年から徐々に、一度に講座が国立になったわけではなくて、昭和39年に初めて10講座が国立に移管いたしまして、その後徐々に、昭和42年までに計26講座が移管されております。それ以

後、麻酔学講座、第3内科学講座、脳神経外科講座、第2生化学講座、放射線基礎医学講座、口腔外科講座、臨床検査医学講座、老年医学講座というように講座が増えていっております。

学生数は、神戸医科大学時代は全部で80名でした。神戸大学医学部になりまして、昭和43年には100名、昭和48年には120名になったという記録がございます。国立移管について、何か情報をお持ちの先生がいらっしゃいましたら、ご発言をお願いします。

前田 今、西岡先生が言われたとおりで、僕も、ごく最近ですけれども、兵庫県のその当時の資料を見に、1週間ぐらい通ったことがあるのです。結局、誰も反対もしないし、とにかくみんなが推進しようとしていたというような感じを持ったのですが、学生の目からどのように映っていたのか、ちょっと知りたいなとは思っています。

(注：時間がなくて多くの参加者の顔写真が準備できませんでした。雰囲気のみのお届けです。編集部)

医師会会員先生方の安心をお手伝いします

- 保険料の安くなる生命保険団体扱
- 掛金の安い第1グループ保険(最高6000万円加入可)
- 従業員も加入できる第2グループ保険(最高1500万円加入可)
- あいおいニッセイ同和損保代理店
- 兵庫県医師会関連団体費用引去制度(先生の手数料負担はなし)

★詳しくは、ホームページをご覧ください。
<http://www.hyogo-ishikyo.or.jp>

昭和30年創立

 **兵庫県医師協同組合**

〒651-0086

神戸市中央区磯上通3丁目2番17号

兵医信本店ビル5階

TEL:078-271-1010

FAX:078-271-1039

神戸大学医学部の皆様へ。

THE ONLY^{※1}

西宮北口、過去最大^{※2}プロジェクト

モダンイズム建築の思想を受け継ぐ端正な私邸。



□外観(平成29年3月撮影)

「プレミスト西宮北口ザ・レジデンス」棟内モデルルーム公開中

■物件概要 ●物件名称/プレミスト西宮北口ザ・レジデンス ●所在地(地番)/兵庫県西宮市丸橋町9番1 ●交通/阪急電鉄神戸線・今津線「西宮北口」駅徒歩10分 ●用途地域/第1種中高層住居専用地域 ●敷地面積/6,193.48㎡(建築確認申請対象) ●建築面積/3,007.57㎡ ●延床面積/13,793.48㎡ ●建築確認番号/第ER115036870号(平成27年9月25日付) ●構造及び階数/鉄筋コンクリート造地上7階建 ●総戸数/149戸(別途 ゲストルーム、オーナーズルーム(集会室)、管理事務室各1戸) ●駐車場空台数/39台(別途来客用平面駐車場2台、サービス車輛用平面駐車場1台) ●月額使用料:6,000円~17,000円 ●バイク置場空台数/9台(バイク置場5台 ミニバイク置場4台):月額使用料1,000円~2,000円 ●駐輪場空台数/134台(ラック式134台) ●月額使用料:100円~200円 ●建物完成年月/平成29年3月完成済 ●入居/即入居可 ●事業主・売主/大和ハウス工業株式会社 本店マンション事業部 ●分譲後の権利形態/敷地は専有面積持分比率による所有権の共有、建物共有部分は区分所有、建物共用部分は専有面積持分比率による所有権の共有 ●管理形態/入居後、区分所有者全員により管理組合を結成し、管理組合と管理会社との間で管理委託契約を締結していただきます。 ●管理会社/大和ライフネクスト株式会社 ●施工/株式会社長谷工コーポレーション ●設計・監理/株式会社長谷工コーポレーション大阪エンジニアリング事業部 ●基本計画・デザイン総監修/株式会社日建ハウジングシステム

■第1期~第3期先着順申込受付概要 ●販売戸数/22戸 ●販売価格(税込)/5,240万円(1戸)~8,490万円(1戸) ●最多販売価格帯/6,100万円台(3戸) ●間取り/3LDK・4LDK ●住居専有面積/70.65㎡~105.10㎡ ※表示面積は壁芯面積ですので、登記面積はこれよりも少なくなります。 ●バルコニー面積/9.40㎡~13.67㎡ ●サービスバルコニー面積/3.67㎡・4.06㎡ ●ルーフトバルコニー面積/24.73㎡・35.43㎡ 月額使用料:1,100円・1,500円 ●ポーチ面積/3.15㎡~11.18㎡ ●アルコブ面積/2.27㎡~5.54㎡ ●専用庭面積/11.32㎡・12.42㎡ 月額使用料:600円 ●テラス面積/12.35㎡・33.50㎡ ●管理費(月額)/8,800円~13,100円 ●修繕積立金(月額)/8,300円~12,300円 ●管理準備金(一括)/17,600円~26,200円 ●修繕積立金(一括)/581,000円~861,000円 ※118号室は平成29年2月11日より棟内モデルルームとして使用しております。 ※209号室・210号室は平成29年3月25日より現地販売センターとして使用しております。 ※423号室は平成29年7月15日より棟内モデルルームとして使用しております。 ※216号室は平成30年2月3日より棟内モデルルームとして使用しております。 ※109号室は平成30年3月23日より棟内モデルルームとして使用しております。 ※414号室は平成30年4月5日より棟内モデルルームとして使用しております。 ※501号室は平成30年4月28日より棟内モデルルームとして使用しております。

■取引条件有効期限/平成30年5月31日 ■広告作成年月日/平成30年4月18日 ■第1期~第3期先着順申込受付場所/プレミスト西宮北口ザ・レジデンス現地販売センター ●申込の際にお持ちいただくもの/印鑑、ご本人様確認資料(運転免許証等)、直近1年分の所得を証明するもの ※詳しくは係員までお問合せください。 ※先着順につきご希望住戸が売約済の場合がございます。あらかじめご了承ください。

※1.※2. THE ONLY、過去最大とは民間による分譲マンションで、阪急神戸線・今津線「西宮北口」駅最寄りかつ、阪急神戸線「北側」において、総戸数・敷地面積が過去最大であることを指しています。(平成27年9月1日現在 MRC調べ) ※徒歩分数については80mを1分として算出し、端数を切り上げたものです。 ※現地販売センター案内図は概略図のため、省略している道路、施設等があります。また、周辺施設については平成29年3月現在のものであり変更になる場合があります。あらかじめ、ご了承ください。



【物件に関するお問合わせ】「プレミスト西宮北口ザ・レジデンス 現地販売センター」

[フリーダイヤル] 0120-149-921 営業時間/10:00am~6:00pm (火・水曜定休 ※祝日は営業しております。)

法人提携割引

販売価格(税抜)から**1%**割引

〈事業主・売主〉

大和ハウス工業株式会社 本店マンション事業部

大阪市北区梅田3丁目3番5号 〒530-8241

Tel 06-6342-0991 Fax 06-6342-0907

建設業許可番号 国土交通大臣許可(特-27-28)第2579号 宅地建物取引業者免許番号 国土交通大臣(15)第245号

(一社)大阪府宅地建物取引業協会会員/(一社)不動産協会会員/(公社)近畿地区不動産公正取引協議会加盟

www.daiwahouse.co.jp



Daiwa House®
大和ハウスグループ

コース特待生2名決まる！ (仁田基礎医学研究医養成プログラム委員長)



特待生制度始まる。

新5年生対象

平成30年度
基礎医学研究医養成プログラム
特待生募集

神戸大学基礎医学研究医育成奨学金
月額2万円給付(2年間)

その他のサポート

- 1 大学院への進学試験免除
- 2 大学院講義の先行履修が可能

大学院進学時に「早期研究スタートプログラム(基礎医学研究医育成特別コース)」を選択した場合に限り、3年生以降に医学部医学科の臨時開設科目として開講した医学研究科医科学専攻(博士課程)の大学院講義の修得単位について、博士課程の修了要件科目として認定することができます。
※臨時開設科目の詳細については、学務課医学科教務学生係に確認してください。

- 3 大学院卒業後、基礎臨床融合教員の研究ポストが与えられます

現在の学生定員は117名ですが、2名は研究医枠です。6年間の在学中に研究医2名を選抜し、大学院4年のうち3年間の早期修了を念頭に取り組んできた最初の優秀な2名が決定しました。奨学金の貸与と基礎臨床融合の観点からの研究医の育成に一步前進しました。大学院では、研究費も多くかかるでしょうから先輩諸兄のご援助をお願いします。

編集後記

それぞれの年代で「1年の過ぎるのは早いとか遅いとか」あるようですが、新入生にとっては合格の日の経つのは早く、卒業生は研修医として一日の経つのが遅くでしょうか？ いずれにしろ大学にとっては重要な節目であり、それぞれの会員には有意義な年度またぎであってほしいものです。

「卒業と入学」テーマでの記念すべきニュースレター第10巻第1号は、皆様の記憶に残る内容になっているのでしょうか？ 記念事業の節目まで1年を残すのみです。募金事業の成否は皆さんの関心の程度によるでしょうが、卒業生及び学生・父兄が何らかの形で参加する活動を行います。今回の座談会が興味をもたれ、全卒業生に広がることを期待します。そして、記念誌の一冊が皆様の手元に長く残ることを祈ります。

編集委員会

神緑会ニュースレター 第10巻第1号

発行 一般社団法人神緑会
会長 前田 盛
〒650-0017 神戸市中央区楠町7丁目5-1
神戸大学医学部内
TEL (078) 361-0616
FAX (078) 361-0617
sinryoku@med.kobe-u.ac.jp

印刷 交友印刷株式会社
〒650-0047 神戸市中央区港島5丁目4-5
TEL (078) 303-0088
FAX (078) 303-1320
info@koyu-p.co.jp